

自転車と女性、そして映画 映像（映画）史における女性と自転車との関係

小林 憲 夫*

Bicycle, Female and Cinema A Relationship between Female and Bicycle, in Cinema History

KOBAYASHI, Norio*

1. はじめに

自転車と女性との関係は一般に想像されているよりはるかに密接である。19世紀に近代的な乗り物として自転車が登場すると、自転車はそれまで馬車や列車に「乗せてもらう」ことでした移動できなかった女性たちが「自分で移動できる」道具として歓迎された。これまで唯一の手段であった馬よりも、自転車ははるかに手軽で扱いやすかったのだ。そして女性は自転車に乗ることで、「自立」「同権」意識が強化され、乗りやすい服装を目指してファッションの変革をも生み出した。20世紀の女性参政権活動や社会進出の流れは自転車が生み出したとすら言えるかもしれない。本稿はこうした自転車の基本的性格を歴史的に述べるとともに、男性社会の象徴である映画においても微小であるが確かな検証を試みたものである。

2. 自転車の歴史

最初の自転車

自転車の歴史を簡単に紹介する。2輪で走行する乗り物を誰が考え出したのか良くわかっていない。古代エジプトの墳墓にも、自転車の原

型らしい絵が見られるし、レオナルド・ダ・ヴィンチが1493年頃にペダルの付いた後輪駆動の2輪車のスケッチをしたとも言われている。ⁱⁱⁱ いずれにしても、歩くことに比べて数倍早く移動できる手段として車輪を持った乗り物はいろいろな組み合わせを試みられたであろう。

2つの車輪を前後に並べてその間にまたがる（あるいは座る）、現代のキックバイクⁱⁱⁱの原型ともいえる2輪車は1817年にドイツで開発されていた。18世紀末に2輪の乗り物は登場していたが、それには操舵装置が付いていないために実用的とは言えなかった。ドイツ人のカール・フォン・ドライスは2輪車に操舵装置を付けることに執念を燃やし、ついに「ドライジーネ」もしくは「ペロシロード」と呼ばれるようになるハンドル付き2輪車の開発に成功した(図1)。非常に原始的ではあるが、現在のキックバイクに乗っている子供たちを見ていると、少なくとも歩行の倍の速度は出ていることが分かる。勢いに乗れば足で蹴る必要もない。ドライジーネをもって「自転車の始祖」と認めるのが定説である。^{iv}

アメリカで発展したデニス・ジョンソンの

*人間総合学群 人間文化学類



図1 ドライジーネ

「ホビーホース」(1819)もドライジーネの改良型と言える。ドライスのドライジーネのフレームとフォークを鉄製にし、特にフレームは湾曲させることで乗りやすくした。名前から明らかに馬の代用品を狙ったものであることがわかるだけでなく、女性にも乗りやすいポジションとなった。さらにジョンソンは史上初の女性専用2輪車を発売した人物と言われている。^v

1840年になると、ついにペダルの付いた2輪車が登場する。スコットランドの片田舎の鍛冶職人カークパトリック・マクミランが世界初のペダル式自転車を作ったのである。この「マクミラン型自転車」は二つの車輪が前後一列に並んでいる点だけは従来と同じであったが、フレーム本体に取り付けられた「棒」の先にペダルが付けられ、さらにペダルからは後輪までシャフトを伸ばし、後輪を直接駆動する機構が備えられていた。最初は足で地面を蹴る必要があったが、勢いがつくとペダルをこぐだけで進むことができる。シャフトの位置と長さを変えれば速度変速もできる画期的な仕組みである(図2)。^{vi}このマクミラン型自転車はペダルが付いただけではなく後輪駆動であることで操舵性も向上した。マクミラン自身の記録として、平均時速は20km/h以上、113kmを2日間で走ったとされている。^{vii}

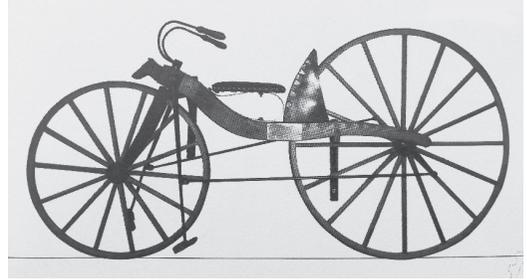


図2 マクミラン型自転車

ペダルの付いた2輪車

だがしかし、この可能性に満ちた2輪車はその後の自転車の主流とはならなかった。1860年代になると、今度は前輪にペダルを付けた前輪駆動の2輪車が開発される。フランスのピエール・ミショーが発明した「ペロシペード」は前輪にペダルを付けた金属製の軽量で乗りやすい2輪車であった(図3)。ミショーは当初は3輪のペロシペードを制作していたが、間もなく2輪のペロシペードが自転車の未来であると信じるようになり、前輪にクランク軸とペダルを付けたばかりでなく鉄製で優美なデザインのフレームを与えたのだ。ペロシペードはデザインの良さでアメリカにサイクリング熱を起こした。^{viii}しかしペダルこそ付くようになったが、それは前輪の軸に直結されただけでありハンドルは相変わらず道路に直角の位置にあった。そのため

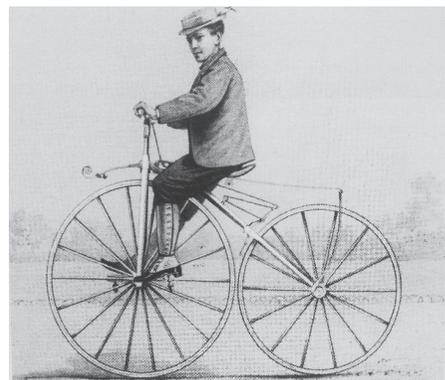


図3 ペロシペード

操縦が難しく、ペダルを踏みこむたびに前輪がぐらついて道を外れるという非常に操舵性の悪い不安定な乗り物であった。そのためイギリスでは、ペロシベードに「ボーンシェイカー」（背骨が揺さぶられる乗り物）というあだ名がついたほどである。

オーディナリーから安全型へ

ボーンシェイカーの時代は比較的短かった。10年後の1870年にジェームズ・スタンレーとウィリアム・ヒルマンがペロシベードのホイールとペダルを改良して、大径のホイールとギア駆動するペダルを備えた「アリエル」を発表したからだ。前輪径126cm、後輪径35cmのアリエルはシェークスピア作品に出てくる「空気の精」から名付けられた優美な全金属製であり、センター・ステアリング型ヘッド^{ix}やソリッドであるがゴムタイヤも装備されまさにオーディナリー自転車の原型となった。^x1870年のアリエルの開発に際し、ジェームズ・スタンレーとウィリアム・ヒルマンの二人が取得した特許でもっとも注目されるのは「スポークホイール」である。ワイヤーで構成されたスポークは、従来の木製よりはるかに軽く強度も備えたばかりでなく、強度という意味でも群を抜いていた^{xi}。スポークによりオーディナリー型という巨大ホイールの自転車が普及し得たと言っても過言ではないだろう。軽量の大径ホイールによる驚異的なスピード走行を実現したアリエルは「オーディナリー型自転車」と呼ばれて自転車競技の人気を高めただけでなく一般にも広く自転車を普及させる原動力となった。イギリスでは自転車人口（自転車に乗っている人数）が、1877年には約3万人、翌年には5万人となり、オーディナリー型自転車の最盛期とされる1884年には約30万人という数字が記録されている。^{xii}

1876年、イギリス人技術者のヘンリー・ロー

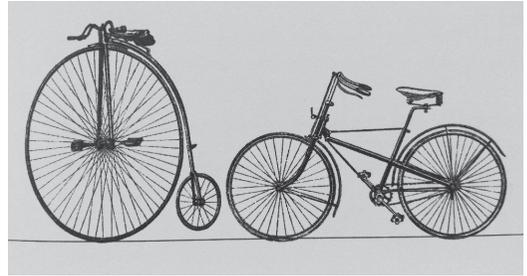


図4 オーディナリー型と安全型自転車

ソンが最初に「安全型」自転車（セーフティ型自転車）の製造に取り組んだ。オーディナリー型自転車との根本的な違いは、ペダルをこぐと前輪ではなく後輪が動く点である（図4は左がオーディナリー型、右が安全型自転車）。これまで通り前輪は後輪より大きいままであったが、オーディナリー型ほど極端な差はなく、前輪が低くなったため安全性が高まった。サドルにまたがっても足が地面に届くので、危険な場面に出くわしても楽に止まれるようになったのだ。乗り手は猛スピードで回転する前輪から足を遠ざけておけるので、まきこみなどの危険が減った。もうひとつの特徴は、後輪を駆動するチェーンだ。それまでトライシクルでしか使われたことのないチェーンを自転車で採用したのは、画期的であった。安全型自転車の登場により自転車は男女関係なく「社会的道具」となり、自転車を所有していない人々でさえ自転車競技を観戦するようになった。1897年のアメリカの自転車産業は700社、生産額は3,192万ドルと、10年間で12.5倍の成長率を記録している。^{xiii}世界の自転車レースの最高峰とされるツール・ド・フランスが始まったのは1903年のことである。

3. 自転車と女性

女性専用自転車の登場

自転車は初期のころは男性の乗り物と考えられていた。その最大の理由は服装の違いによる。

19世紀の女性は長いスカートとコルセット^{xiv}を身に付けており、ボーンシェイカーのような自転車に「またぐ」ことはほぼ不可能であった。だが移動手段として馬車か蒸気機関車もしくは船しかなかったこの時代に、「遠くまで行ける自由」が容易に得られる自転車に対する関心は男性と女性とで違いはなかった。

オーディナリー型自転車の発展は主にイギリスで行われ、アリエルという名称のままで販売された。アリエルは重量23kgで価格は現在の値段にすると2～3,000万円ぐらいであったが、ジェームズ・スタンレーは女性向けのアリエルも開発している。^{xv} もちろんくるぶしまである長いスカートをはいたままではまたがれないので、横向けに乗るスタイルであった。横向け乗車は馬に乗るのと同様であり、自転車が「新しい馬」と認識されていた当時の考え方からすると自然な発想と言えよう。しかし自転車は馬に比べて軽いので、横乗りの場合はバランスを維持する必要がある。そのため前後両輪の並びは一直線ではなく、ペダルは2枚とも前輪の同じ側に付いていた。ハンドルバーは、横乗りでも握りやすいように、一方が短く反対側が長かった。(図5) 後輪は従来のようにフォークで固定するのではなく、張り出した固定軸に取り付けられていた。なお、横乗りによる「偏り」を修正するため、前輪の起動と後輪の軌道はずれていた^{xvi}。

オーディナリー型自転車は「ハイホイラー」と呼ばれる背の高い自転車に分類される。これまでの自転車と比べ、ハイホイラーは車輪が大きいために高い速度が出せる特徴があり、さらに筒形のフレーム構造が採用され車体の軽量化が進んだ結果、1880年代半ばまでに重量は45kgから25kgで軽量化され、最高スピードも25km/hを超える速度に達した。^{xvii} ハイホイラーは不安定で非常に危険な乗り物ではあったが、



図5 男性用と女性用ハイホイラー

多くの若者がそうした危険も顧みず公道レースは日常的となり、一周400メートルの観客席を備えたレース場が普及するようになり、女性のレーサーもエントリーしていた。レースが牽引となり、1880年代末まで各地にサイクリングクラブが誕生し毎年スピードの出る新型車が発表されるといふ男女を問わない自転車ブームが出現したのである。^{xviii} それまでに別のタイプの自転車が発表されたがハイホイラーの人気は衰えず、1885年のローバー型安全自転車の登場以降もしばらくその人気は続いた。

トライシクル

初期の2輪車は、重くて扱いにくく、コントロールが難しいのが難点であった。乗りこなせるのは体力のある青年男性だけで、それ以外の人々が楽しむ機会は少なかった。そんな乗りにくい自転車の代わりと目されたのが、安定感のあるトライシクル(3輪車)だ^{xix}。1789年にフランス人ブランシャールとマギルが製造したトライシクルは、初めて新聞で自転車(2輪車)bicycleとトライシクル(3輪車)tricycleという乗り物の違いを明確にされ、ヨーロッパ中の



図6 トライシクル



図7 仲良くサイクリング

関心の的となった。イギリスではトライシクルが非常に高価であったため、上流階級向けとされたが、圧倒的に支持したのは女性たちであった(図6)。トライシクルはそれまで自転車に乗れなかった女性や老人などを取り込んでいくが、荷物を容易に大量に運ぶことができるために男性の間でも旅行用として普及するようになった。特に1881年にヴィクトリア女王が2台のトライシクルを注文したことで、トライシクルがより上品な乗り物であると認識されるようになり購買層が大きく広がった。結果として1880年代はトライシクルの全盛期となったのである^{xx}。男性の乗るオーディナリー型自転車とのスピード差が3~5キロほどしかないため、女性が普段着のまま安心して乗れるトライシクルは「自由」を求める女性たちに受け入れられたのだ(図7)。女性は運動や健康のためでなく、余暇としてサイクリングを楽しむ始めたのである。最初はペダルをクランクでつないで車輪を回していたトライシクルはペダルと後輪をチェーンでつなぐ方式となり、この点こそが安全型自転車が生まれる発想のきっかけにもなった。

トライシクルによって女性が自転車に乗る機会は大幅に増え、オーディナリー型自転車の男



図8 スピードを競う女性たちを見る男たち

性と一緒にサイクリングすることも可能になった一方で、前述のようにレースの普及によって女性のレーサーも登場している。オーディナリー型自転車に女性が乗ると言うとは、長いスカートをどのように処理したのかと首をかしげるであろうが、まさにその点に当時の男性の関心もあったのである。スカートをまくり上げてペチコート、場合によっては素足を丸出しにしてオーディナリー型自転車に乗ってスピードを競う女性たちを一目見ようとする男性達で大人気を博したようである(図8)。

安全型自転車と女性解放

女性たちが乗るようになったと言っても、ハイホイラーは女性にとって決して乗りやすい

2輪車ではなく、女性たちは安全型自転車が発表されるやそれに飛びついた。チェーン駆動の後輪と減速歯車が開発されると、ホイールのサイズが小さくなり様々なデザインも可能になった。アメリカの有名な女性解放論者、エリザベス・キャディ・スタントンは「今後女性は自転車に乗って投票に行くだろう」^{xxi}と公言した。イギリスでは1890年までにサイクリスト・ツーリング・クラブの会員数が6万人に達していたが、そのうち2万人以上が女性であったという。^{xxii}安全型自転車の登場によってオーディナリー型自転車のようなダイナミックな走りはなくなり、爆発的な自転車ブームは勢いを減じたかもしれないが、少なくとも女性サイクリストの人口は増やしたことは間違いない。

サイクリング雑誌も増え、1880年代半ばまでの期間において、常時5誌程度の2輪車に関する週刊誌が発行され、1890年代後半には、週刊、月刊、併せて少なくとも17誌が存在し、最も購読者数の多い雑誌は週41,000部以上発行されていた^{xxiii}。1895年には女性サイクリストをターゲットにした雑誌「レディー・サイクリスト」も発刊されている^{xxiv}。多くの女性がヴィクトリア朝風の感傷的で堅苦しい道徳観や美的感覚に異議申し立てをするために家庭から飛び出し、公の場で自転車に乗っていたようだ。また彼女たちにとってサイクリングとは、男女同権を訴えるに最適な道具だった。男性ばかりで騒々しく下品とされている公共の場に女性が出ていくことで社会を啓蒙し、家庭的で穏やかな場所にしようとしたのである。しかし一方で、女性が公共の場に現れると、男性たちは自分たちの地位が脅かされるのではないかと不安になって、女性たちを故意に冷やかしたり差別的な冗談を言ったり侮辱するようになった。それには自転車に乗ると肉体的、精神的健康を損なうとか、寿命が短くなるとか、サドルに骨盤が耐え切れ

ず早死にするとかいうものも含まれている。コルセットを脱いでくるぶしが見えるスカートををはいていることで「だらしない女」と揶揄されることもあった。^{xxv}

自転車の普及と女性の服装の変化を見てみると、その一致に驚くとともに自転車の当時の女性の意識改革に果たした役割がわかる。1888年にイギリスでは合理服協会が設立された。女性たちはきついコルセットやかさばるスカート、ヒールが高く先のとがった靴を抜き捨てて、実用的な服が着られるようになったが、当然これは女性サイクリストにとって朗報であった。特にフランスの女性サイクリストは、1868年からすでに屋内自転車レースに参加していたから政治的なメッセージやおしゃれには関わりなくぴっちりした服に身を包むようになっていた。^{xxvi}イギリスでは1860年代からレースに参加する女性はいたが、その流れは安全自転車ができた1890年代になると益々大きくなった。1893年には16歳のデビー・レノルズがブライトンからロンドンまでの193kmを自転車で走り、8時間半で戻ってきた。彼女が着ていたのは合理服協会の服であったのでイギリスの男性サイクリストたちは酷評したが、やがて女性サイクリストは

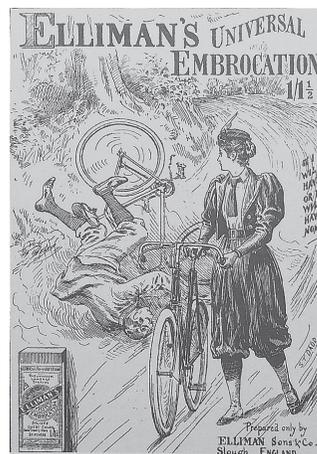


図9 転倒する男性を横目で見ている女性

当たり前の風景となった。これら当時の表現では「きわどい服」は、自転車で走るために着たとしても、自転車を降りてもすぐにわかるように実にシックでモダンであった。ココ・シャネルらが20世紀に入ってから発表するようになったスポーティーでカジュアル・シックなデザインは、女性サイクリストの間では19世紀において自明になりつつあったといえよう。

1895年には16歳のモニカ・ハーウッドが690 kmを走って優勝し、アメリカでは1894年にアニー・コプチョフスキーが女性初の自転車世界一周を成功させている。実にアメリカ人男性トマス・スティーブズが自転車世界一周を完走したわずか10年後のことである。作家のジョン・ゴールズワージーは1930年に自転車に乗る女性をこう評している。「自転車の影響で、多かれ少なかれ、週末は華やかさがあふれるようになった。強い精神と強い脚、強い言葉を持ち、たっぷりしたズボンをはき、服装の知識と森や牧草地の知識を併せ持ち、男女平等を唱え、丈夫な体と専門的な仕事を持っている女性たちを見かけるようになったからだ。一言で言うと、女性が解放されたのである。」^{xxvii} 前ページ図9は自転車で解放された女性をテーマに描かれた当時の挿絵である。

日本ではどうであったか。歌手の三浦環(1884～1946)は東京音楽学校に入学した明治33(1900)年、16歳の時に東京芝から上野の学校まで自転車通学をしたとある。白リボンで風になびく髪を結んだ環が真新しい自転車で通学する姿は話題を呼び、「自転車美人」という題で新聞種にもなった。^{xxviii} 当時自転車は東京府内に3,000台もあり、それほど珍しい乗り物ではなかったが派手な女性が乗っているのが注目されたのであろう。明治36年から読売新聞に連載開始された「魔風恋風」は、ヒロインの萩原初野が颯爽と自転車で登場する場面から始まる。

明らかに三浦環から連想したに違いない設定であるが、その初野が自転車事故に遭い運命が変転するという内容は、当時の日本で自転車と女性はそれほど好意的には受け取られていなかったことがわかる。しかし女性が自転車を自立の一助と捉えていたことは、日本女子大学では設立の翌年(1902年)に自転車部員が200名に達したことで明らかである。^{xxix} 新派劇の創始者川上音二郎の妻である川上貞奴も活動的な女性として有名であるが、彼女が夫の死後に実業家福澤桃介と愛人関係になり木曾福島福澤家に住んでいたころの写真には自転車に乗る川上貞奴が写っている。^{xxx}

4. 映像に登場する自転車

最初の映画と自転車

自転車は映画の中でいつごろから登場したのかという質問には意外な返答が待っている。実は世界最初の「映画」として有名なりユミエル兄弟社の「工場の出口」(La Sortie de l'usine Lumière à Lyon, 1895)の50秒ほどの映像にすでに何台も登場しているのである。この映像では、工場の出口から続々と出てくる女性の労働者に混じって男性が自転車に乗って出てくるところがはっきりと写されている(図10)。安全型自転車が発売されてからまだ10年も経っていないためにかなり高価であり、自転車に



図10 「工場の出口」

乗っている男性は管理者であるのかもしれないが、他の労働者と比べて大きな差はない印象である。もちろん自転車は安全型自転車であり、ブレーキはないがフリーハブ（クランクが空回りしてペダルを常に漕いでいる必要はない）仕様の最新型であることが動画からわかる。

自転車が登場する映画で最も有名なのは「自転車泥棒」^{xxxii}であろう。名前もズバリであるが、1950年代の労働者にとって自転車が大きな財産であり、自転車を持っていることで就業機会も増えるという社会状況が描写されている。一方でこの映画には自転車市場も登場し、市民の生活に自転車がいかに浸透しているかも教えてくれる。同じイタリア映画の「ライフ・イズ・ビューティフル」^{xxxiii}では1940年代のイタリア人の生活が描写され、その中で自転車通勤の様子が重要なシーンとして描かれている。またおなじくイタリア映画「ニュー・シネマ・パラダイス」^{xxxiii}では主人公の少年が幼いころに映写技師の自転車に乗せてもらった映像が重要な回想シーンとして登場する。この映画ではポスターにその場面が取り上げられ、自転車もしっかりと描かれている。

女性と自転車のポスター

19世紀から20世紀にかけての時代に自転車と女性がどのように結びついてきたかがわかる材料は他にもある。絵画を広告メディアとして利用し広告の社会的認識を高めたアルフォンス・ミュシャの絵である。アルフォンス・ミュシャはアール・ヌーヴォーを代表する画家であるが、19世紀末から20世紀初めに活躍したため、産業に関係したポスターを数多く描いている。そしてこの時代はまさに自転車のブームと重なるのである。図11はパーフェクタ自転車（1902年）、図12はウェイヴァリー自転車（1898年）とミュシャの作品である。いずれもブレーキのない初期の



図11 パーフェクタ自転車



図12 ウェイヴァリー自転車

安全自転車が女性とともに描かれている。^{xxxiv}現代で言えばモーターショーなどで高級乗用車に並んで立っているキャンペーンガールになるのであろうが、車のように女性を隣に乗せることができないので、「女性でも乗れる」という安全・安心イメージの効果を狙ったものであると考えられる。

5. 映画における女性と自転車

自立する女性の象徴

映画に自転車が登場するシーンは多くあるが、いずれも男性が乗っていて、女性が自転車に乗っているシーンのある映画は少ない。「アメリカン・グラフィティ」^{xxxv}や「理由なき反抗」^{xxxvi}

を見るまでもなく、米国では高校生でも男子は車を運転するため、自転車が登場するシーンは非常に少ない。1950年代の悩める若者(高校生)を描いた映画でも出てくるのは車ばかりで、女子たちは車に乗る男の子を追いかけるだけである。現代のアメリカでも、自転車に乗る男性は「変人」であり^{xxxvii}、女性にはモテない^{xxxviii}、女性は自転車を美容のための小道具としてしかみなさず^{xxxix}、そこには自転車<オートバイ<自動車という旧態然としたヒエラルキーを感じる。それゆえに女性が自転車に乗るという構図は、「意図的」なものとして検討するに値するのである。ここでは日本映画2本と、ハリウッド映画2本およびフランス映画1本を紹介する。

日本映画ですぐに思い浮かぶのは「二十四の瞳」^{xl}で、「魔風恋風」よろしく高峰秀子がスーツ姿でさっそうと走るシーンである。この作品は1954年制作だが、原作の坪井栄の時代設定は戦前であり、高峰秀子演じる大石先生が小豆島に赴任してくる1928年の島の人たちの反応が興味深い。住まいから分教場までの8kmを歩いて通うのは難しいということで借金をして購入した自転車と、乗りやすい服装ということで新調した洋服(さすがにパンツルックではない)を見た村の大人たちは「ハイカラ」という表現を使って彼女を受け入れない^{xli}。この時代は女性が自己実現し自立を目指せる職業としては「小学校教員」しかない。19世紀から1950年ごろまでは世界各国でも同様の状況であり、西部劇に出てくる単独行動する女性はほとんどが「教師」である。20世紀になって欧米ではタイピストという選択肢も出てきたが、日本では戦前にはそれも叶わない。つまり教員を志すこと自体が「自立した女性」(=「自分で考える女性」)を意味する時代に、自転車はそれを補完する道具として描かれているのである。最後に大石先生は卒業生から自転車をプレゼントされる。奥の間に

飾られた自転車は女性の自立を象徴しそれを称賛するアイコンなのだ。^{xlii}

この構図は戦後でも大きくは変わっていない。1949年以降5回も映画化されている「青い山脈」^{xliii}に、女性と自転車がフィーチャーされているシーンがある。この作品では自転車は定番の小道具であり、1949年版でも最後に先生と生徒が男女でサイクリングする風景が出てくる。もっともこの時代には自転車は高級品であり、むしろ自転車は男性が女性をナンパする道具として描かれている^{xliii}。女性の自意識も明確でなく、最初は拒絶していた男性教師を、具体的な意識改革なども問わないまま最後は受け入れる。自転車と女性に関わるシーンは、1963年版^{xliii}(3回目のリメイク)が一番多く、特にエンディングの男女がサイクリングを楽しむ場面では女子が先頭を走り、男子よりも女子の方が元気に描かれている。ヒロインの集団で自転車登校する場面のある映画はその他にも多いが、最初から最後まで主人公の女性寺沢新子(吉永小百合)が元気で聡明で、最後に自転車でも先頭切って走る姿が印象的である。新子は最初ひとりだけ原付バイクで登校するが、その後自転車通学となり友達との距離感を縮めるという役割も果たしている。原作者の石坂洋次郎にはそれほどの意識はなかっただろう(最初の1949年作品が最も忠実と思われる)ことを考えると、時代精神そのものの変化が感じられる。

ハリウッド映画で女性が自転車に乗っている場面が印象深いのはアメリカン・ニューシネマの代表作「明日に向かって撃て」^{xliii}である。映画の中盤にポール・ニューマン演じるブッチ・キャシディとエッタ・プレイス(キャサリン・ロス)を自転車に乗せて走るかなり長いシーンがある。この場面は登場人物のキャラクターを描く重要なシーンであるとともに、つか

の間の安息という意味でロマンチックな場面でもある。西部劇に自転車という変な印象があるが、1890年代の西部という時代設定なので安全型自転車が登場しても問題はない。ブレーキこそ付いていないがすでに「空気タイヤ」^{xlvii}は実用化されており、二人乗りも難くこなす頑丈さを備え「未来の乗り物だ」「もう馬は古い」というセリフにも説得力がある。小学校教師のエッタがひとり自転車で乗るシーンもあって、このシーンは男性に束縛されない自由な女性であるエッタのイメージに大きく貢献している。

もう一つのハリウッド映画は「モナリザ・スマイル」^{xlviii}である。舞台は1953年の東海岸の保守的な女子大学で、ここの学生たちは大学を花嫁学校としてしか捉えていない。大志をもって赴任してきた美術教師キャサリン・ワトソン（ジュリア・ロバーツ）は保守的な校風だけでなく、キルスティン・ダNSTを筆頭とする高慢学生にも悩まされる。もちろん最後にはワトソン先生の努力が実って生徒に見送られながら去っていくのであるが、そのシーンは先生の乗る車を自転車に乗った女子学生が一斉に追走するというものであり、自転車が女性の自立（意識の覚醒）を象徴するものとして登場しているのは間違いない。

自己の確立と自転車

女性が自転車に乗る数少ない映画で、当時の女性の状況と心理を表す最も良い作品が「突然炎のごとく」^{xlix}である。この映画の原作はアンリ＝ピエール・ロシェの小説。ひとりの女性をめぐる二人の男性との奇妙な三角関係を描いたストーリーの大枠は同名の作品に基づいているが、いくつかのエピソードやセリフはロシェの他の作品から取り出したものである。本作の魅力は何といても主演のジャンヌ・モローの存在感だろう。彼女が演じるカトリーヌは奔放

で開放的なキャラクターで、当時の多くの女性から共感を得た。トリュフォーのもとには「カトリーヌはわたしです」という内容の手紙が世界中から届いたという。特に当時女性解放運動が活発化しつつあったアメリカとイギリスでは、フランス映画としては異例のヒットを記録した。トリュフォー自身は、本作が「女性映画」のレッテルを貼られて政治的な文脈で評価されることや、登場人物と自分とを短絡的に結びつける自己愛的な映画の見方に対して否定的であったと言われる¹が、その内容は優れて女性の意識を高めるものである。

映画の中盤に、カトリーヌが2人の男性ジュールとジムと現在の夫を引き連れて郊外にピクニックに行くシーンがある。このとき全員が自転車に乗っているがカトリーヌはスカート（キュロット）姿でありながら先頭切って走っている（図13）。まさに自分が男どもを引き連れてあるかのような情景であり、実際に彼女は3人の男の心を虜にしていることを映像でも表している。これと対照的なシーンが後半にある。それはカトリーヌが自動車を運転している場面である。彼女は隣にジムを乗せており、そのまま二人は車ごと池に落ちて死んでしまう。運転しているのはカトリーヌであるから、彼女は意図的にジムを道連れにして「心中」したことになる。ここでも彼女は主導権を握っている。このふたつのシーンは、両方ともカトリーヌが主導権を握っていることには違いないが、自転車



図13 「突然炎のごとく」

のカトリーヌは自立した女性の象徴であり、自動車運転するカトリーヌは男を破滅させる悪女である。映画ではカトリーヌは男に寄生する娼婦的な女性として描かれているが、それはひとりで生きるための職業を得る機会がほとんどないこの時代の女性にとって、寄生していても自身の心の自由は失わずにいることが精いっぱい「自立」であったと考えれば、「寄生＝悪女」という模式図は必ずしも当てはまらないだろう。

カトリーヌは自分自身を大切にしたい生き方を主張し、ジュールとジムは彼女のそうした生き様に共感し憧れ従属していったのである。ジュールとジムこそは自立を自ら進んで放棄しカトリーヌに入れ込んだだけであり、それは彼女のせいではない。自転車はそうしたカトリーヌの自立した精神をもっとも良く象徴した乗り物であった。男たちとの程よい距離感と明確な相対位置がカトリーヌにとっては理想であるに違いない。しかし男たちが互いに譲り合ってカトリーヌを都合の良い存在にしようとしたとき、彼女はその主導権を渡すことを拒否し自動車というヒエラルキー（運転者と同乗者という力関係）の明確で、男の象徴である道具を使って自己の圧倒的力関係を誇示したのである。カトリーヌには、男を引き連れた拒否権を認めない入水自殺でしか、自分を失わずにいる道はなかったのだ。残されたジュールはカトリーヌが去って安堵したものの、彼にはもはや何も残っていない。結局カトリーヌは死ぬことによってジュールの残りの人生も永遠に支配したのである。

私にとって「突然炎のごとく」のカトリーヌは、男性に支配されずに自立して生きようとした極めて今日的な女性である。階級制度がまだ色濃く残り女性の権利が認められず職業的自立が困難な当時においては、ある意味で男を利用して生活するという「体と心は別」的な生き方

は一定の正当性を持つのではないかと考える。それはハリウッド映画の「ティファニーで朝食を」ⁱⁱのホリー（オードリー・ヘプバーン）や、「コール・ガール」ⁱⁱⁱのプリー（ジェーン・フォンダ）、そして「プリティ・ウーマン」ⁱⁱⁱⁱのビビアン（ジュリア・ロバーツ）などにも共通する古くて新しい女性像であるのかもしれない。そして自転車はまさしくそうしたカトリーヌの生き方に寄り添うことのできるツールなのである。

6. あとがき

シャーロック・ホームズの妹という設定の若き女性（映画ではティーンエージャー）がなぜ解きをするという設定の映画「エノーラ・ホームズの事件簿」^{iv}の冒頭シーンには、1884年当時最新型であったろう安全型自転車に乗って飛ばす主人公が出てくる。駅に到着する兄のシャーロックとマイクロフトを迎えに行くためである。アクティブで聡明な自立志向の女性というキャラクター設定に自転車は相応しいと考えたのであろう。確かに現在の視点で考えるとそうであるのかもしれないが、自転車は当時の自立を目指す女性にとって自分の意思を示す道具であったと考える私には、エノーラは馬に乗って登場する方が良かった気がする。自転車ではひとりで走るだけで荷物も人も載せることができないから、まだ自動車がない時代としては馬車か馬で行くべきであろう。実際に兄たちと会ってからは馬車を使って帰宅しているのだ（自転車を積んで）。自転車はその普及とともに、貴族の余暇を楽しむ遊びから女性の地位向上のシンボルとして認識されるようになった。ハリウッド映画業界が女性の地位向上や役割重視を訴求するなら、女性スタッフやキャストの占める割合を増やすだけでなく、映画にも自転車をもっと登場させるべきであろう。

7. 脚注および参考資料

- i 『自転車の文化史』 佐野裕二著、中公文庫、1987年 PP24-28
- ii 図説『自転車の歴史』 トム・アンブローズ著、甲斐理恵子訳、原書房、2014年 P9
- iii キックバイクは子供用として販売されているペダルなしの2輪車である。子供用として車輪の径は小さくブレーキも付いていないが、ハンドル操作は可能である
- iv 『自転車の文化史』 佐野裕二著、中公文庫、1987年 P36
この本ではC.F. カウンターの『自転車の歴史と発展』においてもドライジーネを始祖としていると裏付けている
- v 図説『自転車の歴史』 トム・アンブローズ著、甲斐理恵子訳、原書房、2014年 P18
- vi イギリスではマクミラン型自転車を自転車の始祖とする説もある
『自転車の文化史』 佐野裕二著、中公文庫、1987年 P40
- vii 図説『自転車の歴史』 トム・アンブローズ著、甲斐理恵子訳、原書房、2014年 P23
- viii 同 P24
- ix 「センター・ステアリング型ヘッド」とは、前フォーク上部がヘッド・ラッグを貫通している方式であり、今日の自転車と全く同じ構造である
- x 『自転車の文化史』 佐野裕二著、中公文庫、1987年 PP46-47
- xi ホイールの組み方には二通りある。ハブへ正に放射状にスポークが接続する形式をラジアル組みと呼ぶ。最初に実用化されたワイヤースポークホイールはこの形式であった。スポークの長さが最短となるため重量は軽くなるが、トルクを受けた際のスポークへの負担が重くなるため、駆動輪や、ハブ側にブレーキ装置を持つ車輪には使われ

なくなった。これに対して、ハブへ接線状にスポークが接続する形式をタンジェント組みと呼ぶ。トルクの伝達を無理なくおこなえるほか、荷重の分散に優れており、耐久性、衝撃吸収性が高い。当時の写真を見ると、オーディナリー型はホイールが巨大だったせいもあり、ごく初期からタンジェント組みであったことがわかる。

- xii 『19世紀自転車事情』 坂元正樹著、精興社、2015年 P25
- xiii 『自転車の文化史』 佐野裕二著、中公文庫、1987年 P112
- xiv コルセットについては以下のウィキペディア記事を参照している
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B3%E3%83%AB%E3%82%BB%E3%83%83%E3%83%88>
- xv 国際自転車歴史会議は、オーディナリー型自転車の真の発明家はフランス人のウジェーヌ・マイヤーであるとしている。それはマイヤーがスポークホイールを先に考案したのが理由である。しかしマイヤーは申請手続きの不手際により特許は得られていないため、ジェームズ・スタンレーらの特許が有効とされイギリスでの発展が進んだ。
- xvi 図説『自転車の歴史』 トム・アンブローズ著、甲斐理恵子訳、原書房、2014年 P35
- xvii 「高い重心と前方に設置されたサドルのせいで、乗り降りはもちろん、走らせること自体が非常に難しかった。大きな前輪はつねに不安定なので、小石を踏んだりわだちにはまったりすると車体全体が前輪を軸に逆立ちするようにつんのめった。こうなると乗り手はハンドルバーの下に足をはさまれるだけならいいほうで、前方へ投げ出され、頭から地面に落ちることもあった。あ

- なりに頻繁にこういうことが起こるので、「真っ逆さまに落ちる」taking a header という言い方まで生まれた。」
- 図説『自転車の歴史』トム・アンブローズ著、甲斐理恵子訳、原書房、2014年 P36
- xviii 「サイクリストの数と自転車クラブの数は19世紀を通して増加傾向を保ち続けていたようだが、自転車趣味においてクラブが果たしていた役割は、1880年代後半にはすでに衰退傾向にあった」(「19世紀自転車事情」坂元正樹著、精興社、2015年 P30) ようである。これは安全型自転車の登場と期を一にしていることでわかるように、男性にとってハイホイラーの方が魅力的な存在であったようだ。
- xix 実用的なトライシクルの製造は1680年にすでに始まっていた。ニュルンベルクに住む足が不自由なドイツ人時計職人、シュテファン・ファーフラーが、変速ギアの付いた手回し式の初期トライシクルを作っている。(図説『自転車の歴史』トム・アンブローズ著、甲斐理恵子訳、原書房、2014年 P54)
- xx 『19世紀自転車事情』坂元正樹著、精興社、2015年 P177
- xxi Elizabeth Cady Stanton, 図説『自転車の歴史』トム・アンブローズ著、甲斐理恵子訳、原書房、2014年 P109
- xxii 同 P69
- xxiii 「19世紀自転車事情」坂元正樹著、精興社、2015年 P32
- xxiv Lady Cyclist, 1895-97 「19世紀自転車事情」坂元正樹著、精興社、2015年 P34
- xxv 図説『自転車の歴史』トム・アンブローズ著、甲斐理恵子訳、原書房、2014年 P69
- xxvi 同 P70
- xxvii 同 P71
- xxviii 『自転車の文化史』佐野裕二著、中公文庫、1987年 PP150-151
- xxix 同 P154
- xxx 福沢桃介記念館(長野県木曾郡南木曾町吾妻2196-1)に写真がある
- xxxi 「自転車泥棒」Ladri di Biciclette, 1948 ヴィットリオ・デ・シーカ監督、イタリア映画
- xxxii 「ライフ・イズ・ビューティフル」La vita è bella, 1997 ロベルト・ベニーニ監督、イタリア映画
- xxxiii 「ニュー・シネマ・パラダイス」Nuovo Cinema Paradiso, 1988 ジュゼッペ・トルナトーレ監督、イタリア映画
- xxxiv ブレーキがないということは「止まらない」ということではない。初期の自転車のブレーキは固定式もしくはコースター・ブレーキと呼ばれる制動装置が付いていた。固定式とは文字通りクランクとペダルがつながっていて、漕ぐのをやめれば止まるというピスト方式のブレーキである。コースター・ブレーキとはクランクはフリーであるが逆回転させるとロックされるという方式で、今も日本以外の世界中で使われている。
- xxxv 「アメリカン・グラフィティ」American Graffiti, 1971では車自体が男子のアイデンティティになっていて女子はそれを選ぶ様子が描かれている
- xxxvi 「理由なき反抗」Rebel without Cause, 1955では高校生たちが車でチキンゲーム(度胸試し)を行う様子が描かれている。彼ら男子は全員車に乗っているのだ
- xxxvii 「バーン・アフター・リーディング」Burn After Reading, 2008に登場するブラッド・ピット演じる自転車好きは能天気な筋肉バカという設定である

- xxxviii 「ヤング・ジェネレーション」 Breaking Away, 1979の主人公はレース常勝の自転車好きの好青年だが、イタリアかぶれでガールフレンドなしの設定になっている
- xxxix 「マイ・インターン」 The Intern, 2015のヒロイン（アン・ハサウェイ）は会社内の移動を美容のためと称して自転車で行っている
- xi 「二十四の瞳」 1954, 木下恵介監督, 松竹映画
- xii 「ハイカラ」の語源は男性の襟高シャツ high collar であり、日本では「開国主義者や進歩主義者のキザな感じを冷評する際に、その象徴として特徴的高襟を着けた服装を指したもの」であり「外面や形式のみを追い求める軽佻浮薄な様子といった負の意味が強かった」ようである。従って「二十四の瞳」での使用は「女のくせに男みたいなマネをして」というニュアンスが強かったと思われる。（引用はウィキペディアより）
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8F%E3%82%A4%E3%82%AB%E3%83%A9>
- xiii 坪井栄の原作ではそういう場面はなく、教え子の一人から「自転車をお買いになるのでしたら相談に乗りますから」と言われるだけである。大石先生は教え子との思い出を汚したくないと思っただけ沈黙する
- xiii 「青い山脈」石坂洋次郎の小説『青い山脈』を原作として制作された映画。1949年・1957年・1963年・1975年・1988年の5回製作された
- xiv 校内医師沼田（竜崎一郎）は、同僚の教師島崎雪子（原節子）を「自転車で送ります」と誘う。彼は気に入った女性を見ると「自転車で送る」と誘う常習犯である（「青い山脈」1949年今井正監督、東宝
- xlv 「青い山脈」1963, 西河克己監督、日活
- xlvi 「明日に向かって撃て」 Butch Cassidy and the Sundance Kid, 1969, ジョージ・ロイ・ヒル監督
- xlvii 「空気タイヤ」はアイルランドのジョン・ダンロップが1888年に発明し、翌年にはほとんどの自転車に採用されていた
- xlviii 「モナリザ・スマイル」 Mona Lisa Smile, 2003 マイク・ニューエル監督
- xliv 「突然炎のごとく」 Jules et Jim, 1962, フランソワ・トリフォー監督
- i ウィキペディア「突然炎のごとく」より 2020年10月18日取得
- ii 「ティファニーで朝食を」 Breakfast at Tiffany's, 1961 ブレイク・エドワーズ監督
- iii 「コール・ガール」 Klute, 1971 アラン・J・パクラ監督
- iiii 「プリティ・ウーマン」 Pretty Woman, 1990 ゲイリー・マーシャル監督
- lv 「エノーラ・ホームズの事件簿」 Enola Holmes, 2020 Netflix 配信
- 図1～9 図説『自転車の歴史』トム・アンブローズ著, 甲斐理恵子訳, 原書房, 2014年
- 図10 「工場の出口」より静止画取得
- 図11、12 インターネットの著作権フリーサイト
<https://publicdomainq.net/?s=%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%82%B7%E3%83%A3>
より
- 図13 「突然炎のごとく」より静止画取得